

農薬の使用に伴う事故及び被害の発生状況

1. 人に対する事故

(単位:件(人))

区 分 \ 年 度		18	19	20	21	22
死 亡	散布中	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	誤 用	5 (5)	0 (0)	3 (3)	3 (3)	3 (3)
	小 計	6 (6)	0 (0)	3 (3)	3 (3)	3 (3)
中 毒	散布中	8 (11)	10 (26)	7 (38)	8 (42)	11 (21)
	誤 用	11 (17)	9 (9)	9 (24)	16 (34)	24 (28)
	小 計	19 (28)	19 (35)	16 (62)	24 (76)	35 (49)
計		25 (34)	19 (35)	19 (65)	27 (79)	38 (52)

(注) 集計した事故には、発生時の状況が不明のものも含む。

区分欄の「誤用」は、誤飲・誤食等を指し、自殺は含まない。散布中以外の事故を含む。

(原因別)

区 分 \ 年 度		18	19	20	21	22
マスク、メガネ、服装等装備不十分		5 (5)	2 (2)	2 (2)	1 (1)	3 (3)
強風中や風下での散布等本人の不注意		5 (5)	4 (4)	1 (2)	0 (0)	1 (1)
長時間散布や不健康状態での散布		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
防除機の故障、操作ミスによるもの		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (4)
散布農薬のドリフトによるもの		0 (0)	0 (0)	2 (23)	2 (2)	2 (2)
農薬使用後の作業管理不良		2 (4)	2 (18)	4 (16)	5 (39)	2 (11)
保管管理不良、泥酔等による誤飲誤食		5 (11)	3 (3)	7 (16)	6 (6)	12 (12)
薬液運搬中の容器破損、転倒等		0 (0)	0 (0)	2 (5)	3 (9)	1 (4)
その他		1 (1)	2 (2)	0 (0)	4 (16)	1 (1)
原因不明		7 (8)	6 (6)	1 (1)	6 (6)	13 (14)
計		25 (34)	19 (35)	19 (65)	27 (79)	38 (52)

2. 農作物、家畜等に対する被害

(単位:件)

区 分 \ 年 度		18	19	20	21	22
農 作 物		6	8	17	8	7
家 畜		0	0	0	0	0
蚕		0	0	0	0	0
蜜 蜂		4	2	2	5	6
魚 類		11	8	5	6	4
計		21	18	24	19	17

3. 自動車、建築物等構造物に対する被害

(単位:件)

区 分 \ 年 度		17	18	19	20	22
自 動 車		1	0	1	0	0
建 築 物		0	0	0	0	0
そ の 他		6	4	0	1	0
計		7	4	1	1	0

1. 人に対する事故及び被害の発生状況

原因	発生日	使用現場の区分※1	中毒の内容		被害者情報		中毒発生時の状況	一般的な防止策
			症状	中毒の程度	年齢	被害者数		
マスク、メガネ、服装等装備不十分	H22年6月	農業	頭痛、手のしびれ。	軽症	40～59歳	1	散布時に装備不十分のため暴露した。	・農薬の調製又は散布を行うときは、農薬用マスク、保護メガネ等防護装備を着用する。 ・作業後は身体を洗い流し、洗眼・うがいをするとともに衣服を交換する。
	H22年6月	農業	咽の痛み、倦怠感。	不明※2	60～79歳	1		
	H22年7月	農業	嘔吐、下痢、倦怠感。	中軽症	60～79歳	1		
強風中や風下での散布など本人の不注意	H22年7月	その他	肩、頭、皮膚の痛み。発熱。	軽症	60～79歳	1	農薬散布時に急に風向きが変化したため、顔にかかった。	・農薬を使用する際は風速や風向き等に注意する。
防除機の故障、操作ミスによるもの	H22年6月	農業	眼の痛み、吐き気。	不明	不明	2	土壌くん蒸剤(クロルピクリン:劇物)の使用時に防除機のチューブ部分を障害物により破損。くん蒸剤が漏洩し、揮発成分で周辺住民が体調不良を訴えた。	・防除機を操作する際は、障害物に注意し安全に行う。 ・農薬を散布する場合は、周辺住民等の関係者に事前に連絡する。
	H22年7月	農業	吐き気、嘔吐、ふらつき。	軽症	80歳～	1	農薬散布時に防除器具のノズルが破損し、暴露した。	・散布に当たっては、防除器具等の十分な点検整備を行う。
	H22年7月	農業	眼、のどの痛み、吐き気。	軽症	60～79歳	1	土壌くん蒸剤(クロルピクリン:劇物)を土壌灌注するためのポンプ配管内にくん蒸剤が残っていたため、器具を洗浄する際に漏洩した。	・揮発性の高い農薬を取り扱う際は、器具の洗浄時も農薬用マスク、保護メガネ等防護装備を着用する。
散布農薬のドリフトによるもの	H22年5月	農業	眼の充血、腫れ、痛みなど。	軽症	60～79歳	1	農薬散布中に圃場周辺を通行した者が体調不良を訴えた。	・住宅地等の周辺で農薬を使用する際は周辺住民に事前に周知する。 ・散布圃場周辺に関係者以外が立ち入らないよう、必要に応じて立て札を立てるなど注意喚起を行う。
	H22年7月	その他	のどの痛み、頭痛。	不明	40～59歳	1	事前周知をせずに住宅地で除草剤を使用したため、飛散した除草剤により周辺住民が体調不良を訴えた。	・住宅地等の周辺では耕種的防除や物理的防除など農薬以外の防除手法を検討する。 ・飛散が少ないと考えられる剤型を選択したり、飛散低減ノズルを使用するなど、飛散防止対策を十分に行う。 ・薬剤が飛散しないよう風速や風向き等に注意する。 ・住宅地等の周辺で農薬を使用する際は周辺住民に事前に周知する。

1. 人に対する事故及び被害の発生状況

原因	発生月	使用現場の区分※1	中毒の内容		被害者情報		中毒発生時の状況	一般的な防止策
			症状	中毒の程度	年齢	被害者数		
農薬使用後の作業管理不良	H22年5月	農業	眼の痛み。	軽症	成人	10	土壌くん蒸剤(クロルピクリン:劇物)の使用時に被覆が不十分であったため、くん蒸剤の揮発成分で周辺住民が体調不良を訴えた。	・風下や圃場より低いくぼ地に人家や畜舎がある場合はガスによる危被害の発生に十分配慮する。 ・土壌くん蒸の際は被覆を完全に行う。 ・適正な厚さの被覆資材を用いる。 ・適正な土壌水分となるよう、事前に調整する。
	H22年6月	農業	眼の痛み。	軽症	不明	不明		
保管管理不良、泥酔等による誤飲誤食	H22年6月	その他	意識障害。	中軽症	60～79歳	1	飲料・食品と間違えて誤飲した。	・農薬は飲食物と分けて保管する。 ・農薬は、農薬保管庫の中に施錠して保管する等、安全な場所に保管する。
	H22年12月	その他	喉の痛み。	中軽症	40～59歳	1		
	H23年2月	その他	吐き気、嘔吐。	軽症	80歳～	1		
	H22年6月	農業	嘔吐。	軽症	80歳～	1	農薬を飲料と並べて保管したため、誤飲した。	
	H22年7月	農業	嘔吐、意識障害。	中軽症	80歳～	1		
	H22年9月	農業	嘔吐、全身発汗、両下肢しびれ、筋けいれん。	軽症	60～79歳	1	農薬を飲料と同じ冷蔵庫で保管したため、誤飲した。	
	H22年9月	その他	嘔吐、胃出血。	重症	60～79歳	1		
	H22年8月	その他	舌の痛み、のどの晴れ。	中軽症	40～59歳	1	農薬と飲料を一緒に持っていたため、間違えて誤飲した。	・農薬は飲食物と分けて保管・管理する。
	H22年7月	その他	胸やけ。	軽症	80歳～	1	農薬を飲料の容器に移し替えて保管したため、誤飲した。	・農薬を他の容器(飲食物の空容器等)へ移し替えてはならない。
	H23年1月	その他	詳細不明。	死亡	60～79歳	1	栄養剤の容器に移し替えて保管していた農薬を他人に間違えて手渡して誤飲させた。	
	H22年6月	農業	詳細不明。	死亡	60～79歳	1	野生動物の駆除目的で農薬(殺虫剤)を食品に塗布したため、他人が誤食した。	・野生動物の駆除など、本来の目的以外で農薬を使用しない。
	H22年6月	その他	詳細不明。	不明	不明	1	長期間の保管により土壌くん蒸剤(クロルピクリン:劇物)の缶が腐食し、漏洩したため、揮発した成分を吸入して体調不良を訴えた。	・農薬は余らないように計画的に購入し、使いきるよう努める。 ・使用残農薬や不要になった農薬は廃棄物処理業者に処理を依頼するなど適正に処理する。

1. 人に対する事故及び被害の発生状況

原因	発生日	使用現場の区分※1	中毒の内容		被害者情報		中毒発生時の状況	一般的な防止策
			症状	中毒の程度	年齢	被害者数		
薬液運搬中の容器破損	H22年6月	その他	吐き気、眼の痛み。	軽症	40～59歳	1	運送業者の配送施設において、積荷の土壌くん蒸剤(クロルピクリン:劇物)の缶が腐食し、漏洩していたため、揮発した成分を吸入して体調不良を訴えた。	・農薬の輸送を委託する際は農薬の性状や毒性、取扱い上の注意事項、事故時の対応方法などの情報を提供する。 ・農薬を輸送する際は農薬の性状や毒性、取扱い上の注意事項、事故時の対応方法どの情報を入力するよう努める。 ・移送時の取扱いは注意事項などを守り注意して行うこと。 ・農薬を取り扱うときは、農薬用マスク、保護メガネ等防護装備を着用する。
			眼の痛み。	軽症	20～39歳	2		
					40～59歳	1		
その他	H22年4月	農業	眼の痛みなど。	軽症	60～79歳	1	土壌くん蒸剤(クロルピクリン:劇物)を使用後に空容器を道路脇に放置したため、残っていた農薬が揮発して通行人が体調不良を訴えた。	・土壌くん蒸剤の空容器は、安全な場所に保管する。 ・空容器や使用残農薬および不要になった農薬は、廃棄物処理業者に処理を依頼するなど適正に処理する。
原因不明	H22年6月	その他	上半身発赤。	中軽症	40～59歳	1	農薬の皮膚接触による中毒症状と考えられる。	・農薬の調整又は散布を行うときは、農薬用マスク、保護メガネ等防護装備を着用する。 ・飛散が少ないと考えられる剤型を選択したり、飛散低減ノズルを使用するなど、飛散防止対策を十分に行う。 ・薬剤が飛散しないよう風速や風向き等に注意する。 ・住宅地等の周辺で農薬を使用する際は周辺住民に事前に周知する。
	H22年4月	その他	皮膚の炎症。	不明※2	40～59歳	1		
	H22年8月	その他	目のかゆみ、咳。	不明※2	不明	1	農薬の吸入による中毒症状と考えられる。	
	H22年10月	その他	—	不明※2	20～39歳	1		

1. 人に対する事故及び被害の発生状況

原因	発生月	使用現場の区分※1	中毒の内容		被害者情報		中毒発生時の状況	一般的な防止策
			症状	中毒の程度	年齢	被害者数		
原因不明	H22年5月	その他	—	不明※2	60～79歳	1	農薬の服用による中毒症状と考えられる。	・農薬を他の容器(飲食物の空き容器等)へ移し替えてはならない。 ・農薬は飲食物と分け、農薬保管庫の中に施錠して保管する等、安全な場所に保管する。
	H22年6月	その他	—	不明※2	不明	1		
	H22年7月	その他	—	不明※2	不明	1		
	H22年9月	その他	—	不明※2	60～79歳	1		
	H22年10月	その他	嘔吐。	中軽症	60～79歳	1		
	H22年5月	その他	—	不明※2	不明	1		
	H22年6月	その他	吐き気、嘔吐。	中軽症	80歳～	1		
	H23年1月	その他	詳細不明。	死亡	40～59歳	1		
	H22年4月	その他	眼の痛み、皮膚の炎症。	軽症	成人	2	農薬との因果関係は不明だが、地域で農薬散布がされる時期に、住民が体調不良を訴えた。	・住宅地等の周辺では耕種的防除や物理的防除など農薬以外の防除手法を検討する。 ・飛散が少ないと考えられる剤型を選択したり、飛散低減ノズルを使用するなど、飛散防止対策を十分に行う。 ・薬剤が飛散しないよう風速や風向き等に注意する。 ・住宅地等の周辺で農薬を使用する際は周辺住民に事前に周知する。

※1 使用現場の区分とは、農業現場での使用を「農業」、それ以外を「その他」としています。

※2 医療機関を受診していないため、中毒の程度は不明です。

2. 農作物、水産動植物等に対する被害

被害対象	発生日	被害状況	被害発生時の状況	一般的な防止策
農作物	H22年6月	農作物の白化・枯死。	隣接する圃場で用いた除草剤が飛散した。	・飛散が少ないと考えられる剤型を選択したり、飛散低減ノズルを使用するなど、飛散防止対策を十分に行う。 ・薬剤が飛散しないよう風速や風向き等に注意する。
	H22年6月	稲の変色。	畦畔で用いた除草剤が飛散した。	
	H22年7月	たまねぎの葉の萎縮・枯死。	農道脇で用いた除草剤が飛散した。	
	H22年8月	稲の枯死。	隣接する土地で用いた除草剤が飛散した。	
	H22年11月	みずなの白化。	他作物に除草剤を散布した防除器具を用いてみずなに灌水した。	・防除器具と灌水に用いる器具を分ける。 ・農薬使用後は防除器具を十分に洗浄する。 ・農薬使用前は防除器具を点検し、十分に洗浄されているか確認する。
	H23年3月	大麦茎葉の黄化。	除草剤の使用時期を誤認し、出芽前に散布すべきところを生育期に散布した。	・農薬の使用に当たっては、容器の表示事項等をよく読み、適正に使用する。
	H23年3月	麦の生育抑制。	殺虫・殺菌剤と除草剤を誤認。	
みつばち	H22年4月	防除期間中にみつばちが斃死。	農薬使用との因果関係は不明であるが農薬使用時期にみつばちの斃死が発生した。	・耕種農家は、巣箱の位置や設置時期に関する情報の提供を受けて、事前に養ほう家に農薬使用の情報を提供し、農薬を散布する時は養ほう家に巣箱の退避や巣門を閉じる等の対策をとるよう促す。 ・養ほうが行われている地区では、みつばちの巣箱およびその周辺にかからないよう、飛散に注意する等、みつばちの危害防止に努める。
	H22年5月	防除期間中にみつばちが斃死。		
	H22年8月	防除期間中にみつばちが斃死。		
	H22年8月	防除期間中にみつばちが斃死。		
	H22年8月	防除期間中にみつばちが斃死。		
	H22年8月	防除期間中にみつばちが斃死。		
魚類	H22年4月	魚類の斃死。	農薬との因果関係は不明であるが、農薬が原因の一つとして考えられる。	・飛散が少ないと考えられる剤型を選択したり、飛散低減ノズルを使用するなど、飛散防止対策を十分に行う。 ・薬剤が飛散しないよう風速や風向き等に注意する。 ・使用残農薬や不要になった農薬は、廃棄物処理業者に処理を依頼するなど適正に処理する。
	H22年7月	魚類の斃死。		
	H22年6月	魚類の斃死。		
	H22年11月	魚類の斃死。		